

外的景観と内的景観の横断によるけん制 —ペルー、カハマルカ県の鉱山開発をめぐる事例から—

古川 勇氣¹

要旨 近年、ラテンアメリカ各地では近代開発や鉱山開発が盛んにおこなわれている。従来の研究では開発に対する現地住民の「伝統的な」世界観に根差した抵抗という図式が議論されてきた。特に開発をめぐるアンデス人類学的研究の多くでは、景観人類学における外的／内的景観という整理を援用すると、彼らの「伝統的な」世界観と呼応する内的景観に依拠して開発現象に抵抗するという図式が展開されてきた。それに対して本稿は、ペルー、カハマルカ県バンバマルカの開発をめぐる住民同士の関係において直接的な抵抗だけではなく、お互いが折衝・調整することで開発へのけん制につながる実践を明らかにする。

バンバマルカの民話を用いた観光ツアーでは、観光客は特定の景観に関わる民話を知ることで外的／内的景観を部分的につなげる経験をしている。ガイドのミゲルは、こうした民話を用いた内的景観の理解を、鉱山からの利益を期待する住民にも提供している。そこでは、開発による利益を期待した住民が、開発に乗ることを思いとどまることも生じていた。以上を通じて、本研究では、外的／内的景観の横断という「オルタナティブな」道筋が結果として開発に対する非直接的な抵抗となりうることを指摘する。

キーワード：アンデス・鉱山開発・外的／内的景観・民話

I はじめに

近年のラテンアメリカ諸国では、近代化や都市化に伴う道路建設などの地域開発が展開している。また2002年後半以降、石油、天然ガス、鉱物資源の国際価格が未曾有の高騰をみせたことで「資源ブーム」が始まり、資源国家が多く存在するラテンアメリカでは鉱山開発も盛んにおこなわれている。これらの地域開発と鉱山開発に対して、現地住民は逃散や噂話といった日常的抵抗¹⁾から、集団的なデモ行進、暴力的な抵抗運動まで、様々なかたちの「抵抗」を示している。

従来の研究は、こうした「抵抗」をグローバル市場に刺激された近代開発に対して「伝統的な」世界観を維持しようとする現地住民による抵抗とみなす議論を展開してきた。だが、こうした近代と伝統を対置する図式では、開発と折り合いをつけ解決の糸口を探り出そうとする現地のミクロな実践が看過されてしまう。

そこで本稿では、開発をめぐる住民同士の関係において相互に折衝・調整を目指した

1：立命館大学衣笠総合研究機構

事例を扱う。本稿の研究対象地は、南米ペルー共和国（以下ペルー）北部山岳地域カハマルカ県の田舎町バンバマルカである。本稿は、開発をめぐる反発する住民と迎合する住民との関係には直接的な抵抗だけでなく、民話を用いてミクロに調整し合うという「オルタナティブな」道筋によって、結果として開発へのけん制となる作用が生じる可能性を明らかにする。

以下では、本稿は景観人類学で提起された外的景観と内的景観という分析概念を用いて議論を進める。後述するが、外的景観とは、観光客など外部者がただ見ている物質的な景観である。他方、内的景観とは現地住民の自然景観に対する精神世界やイメージの世界である。景観人類学では、開発をめぐる外部者と内部者との対立関係は議論されてきたが、内部者であるが外的景観として開発を眺める住民については議論が不十分であったこと、また開発をめぐるアンデス人類学的研究の多くでは、現地の精神的存在を本質的なものと捉えることで、内的景観からの外的景観への抵抗という図式を議論してきたことを指摘する。バンバマルカでも民話を根拠として開発に反発する住民の姿勢がみられることを示す。

そのうえでバンバマルカにおける旅行ツアーガイドであるミゲル（仮名）の民話を用いた実践を検討し、観光客が外的／内的景観を部分的に往還する経験を得ることを詳述する。最後に、自然景観に対して文化的価値を重んじるミゲルと鉱山開発による経済的利益を期待する住民ファン（仮名）との間で起きたいざこざを考察する。その検討を通じて、従来論じられた「伝統的な」立場からの抵抗ではなく、民話によって部分的に外的／内的景観がつながるといふ「オルタナティブな」道筋によって、回りまわって開発へのけん制につながる作用が生じる可能性を指摘する。

II 外的景観と内的景観をめぐる議論

景観人類学では、様々な分析視点が提示されてきた。そのなかでただ見ている物理的な景観と景観への意味づけとの関係を理解し、開発現象における議論を見直すことを試みる。そのため外部者／内部者、外的景観／内的景観についての研究を中心に検討する。

1990年代以降に、景観をめぐる人類学的研究は英語圏を中心に注目されるようになった。エリック・ハーシュ（Hirsch 1995）らが提示した〈空間（space）〉と〈場所（place）〉をめぐる研究は、景観人類学において主要な流れの1つを形成した。

景観人類学を研究する河合洋尚は、〈空間〉はたとえば国家、都道府県、保護区など、政治的に境界づけられた領域的な面を指し、政治・経済的な力学が問われてきた。他方〈場所〉は親族・近隣などの社会関係が結ばれるとともに、記憶やアイデンティティを共有する生活の舞台を指し、人類学者たちは〈空間〉の景観に抗することで立ち現れる地域住民側の景観を模索することに傾倒してきたと整理する（河合 2013：5）。

このように、〈空間〉は外部者のただ見ている物理的な景観であり、政治的力学などが作用する場であるが、〈場所〉は現地集団に意味づけされる景観であり、内部者の生活の舞台である。この整理から、外部者／内部者という区分に着目してみる。

レイモンド・ウィリアムズは、景観という概念から外部者 (outsiders) と内部者 (insiders) とを区別した。外部者とは大農園地主、開発者、実業者、芸術家のように景観を資源とするが、実際には住んでない人物を指し、内部者とは実際に住んでいる住民を指す (Williams 1973)。この区別を援用してハーシュは、内部者は現地の自然に根付いて生活するものであり、外部者は自然景観を商品価値／所有価値の観点から理解するものであるとす。ただし両者の文化的歴史的コンテクストによって、決して相互に排他的になるものではないと論じる (Hirsch 1995 : 13)。彼は自然景観をめぐる外部者は経済的価値を重んじ、内部者は自然・文化的価値を重んじると明確な区別をしている。

ハーシュの区分から、トム・セルウェンは内部者の方が自然により近く、より「真正な」営為に従事していると指摘する (Selwyn 1995:132-133)。またクリスティーナ・トレンは、ハーシュの区分をもとに、外部者が現地にもたらした近代化や都市化の影響を内部者が社会的文脈に応じて解釈していると論じている (Toren 1995 : 176-179)。このような指摘から、外部者と内部者の間には依拠する価値観の違いから隔たりがあると考えられる。

景観人類学においてこうした外部者／内部者という整理に1つの方向性を示したのがパメラ・J・スチュワートとアンドリュー・ストラザーンである。彼らは外部者の景観と現地住民のイメージ世界について、外的景観と内的景観という分析概念を提起した (Stewart and Strathern 2003・2005)。外的景観とは、外部者 (とくに観光客) がただ見ている景観である。他方、内的景観とは、個人が想像的でシンボリックな意味によって場所の知覚的経験を溶け込ませた景観であり、現地住民のイメージの世界や精神世界のことである (Stewart and Strathern 2003 : 8)。彼らの整理によって、外部者と内部者の間の隔たりの要因の1つには、自然景観に対する「眺め方」の違いが関連していると指摘できる。つまり、内的景観とは景観そのものだけでなく、住民の特定の景観に対するイメージ世界などで形成される内的なまなざしも含むものである。本稿における事例の検討では、そのまなざし方を体験するかどうか焦点となっている。

次に彼らの整理や分析視点をもとに、景観人類学における開発に関する研究や議論を検討する。スチュワートとストラザーンはパプア・ニューギニアの世界観や儀礼、歌などを調査し、石油汲み上げ開発に対する住民たちの抵抗を次のように論じている。現地の住民は、死者の油脂 (油) が大地を潤し肥沃にするというイメージの世界を持っている。そのため彼らは、近年、現地でおこなわれている石油汲み上げ開発によって大地の油がとられ、大地が枯渇してしまうことを危惧し、開発に抵抗している (Stewart and Strathern 2005 : 35-37)。現地住民は景観や大地をイメージの世界と関連して見つめているのに対して、開発業者は景観を単なる物質的なもの、あるいは経済的価値のあるもの

と捉えており、同じ景観に対して異なる拠り所によるまなざし方が異なっているのである。

小西公大はインドのタール砂漠での風力発電の開発に対して、現地住民はイメージや民話に基づいて抵抗していると論じる。その研究で、彼は開発について次のように痛烈に批判している。「…自然と人間の双方向的営為が間主体的に絡み合い、長時間をかけて構築されてきた複合的な景観のあり方を一切、無に帰そうとする、開発という営為のもつ排除の力学が存在している」（小西 2016：247-248）。現地住民の内的景観から開発を捉えようと、外部者の存在が暴力的にすら映る場合がある。

他にも類似の事例は、マダガスカルMadagascarの森林利用において焼き畑などで利用する現地住民と保全プロジェクトとの対立（Harper 2003）や、ジャマイカでの漁師の景観に対するイメージと観光業の保全との対立（Garrier 2003）など、世界各地でみられる。

以上、景観人類学の分析視点を手がかりに開発に関する研究を概観した。景観人類学の多くは、開発をめぐる外部者と内部者の対立関係を強調しているとも考えられる。だが内部者であるが外的景観として開発を眺める住民についての言及は乏しい。開発をめぐる住民同士ではあるが景観のまなざし方が異なる者同士のいざこざ、口論、争いというものは十分に考えられる。両者の関係は直接的な対立関係ではなく、折衝・調整という道筋をたどる可能性があり、先行研究の議論を相対化して補完するものである。

また本稿は観光の事例を扱うが、景観を観光開発することで「開発優先／景観保護」という問題が浮上する。この問題は単純に「外的景観／内的景観」の問題から解決されるわけではない。だが本稿では、開発と住民の直接的な対立関係だけではなく、「オルタナティブな」方途を示すことで、観光における問題も併せて考え直すことを試みる。

次章では、事例に入る前に本稿の調査地域であるアンデスの事例をもとに開発に対する住民の抵抗図式を検討する。

Ⅲ アンデスにおける開発と住民との関係

1 開発をめぐるアンデス人類学的研究

フェルナンド・サントス＝グラネーロは、ペルー、アンデス東斜面のヤネシャ（Yanesha）コミュニティを調査し、現地での道路拡張という近代開発の影響について論じている。1970年代後半から1980年代半ばにかけて道路拡張開発がおこなわれた際、現地の人びとの間で建設中の道路に Pishtacos（スペイン語で corta-cuellos、英語で throat-cutters）という精霊が出るという噂話がささやかれた。精霊の姿は白人のような風体で、コミュニティの人間も外部者（作業員）も襲い殺すといわれていた。そうした噂話がまことしやかにささやかれる中、建設現場で大規模な土砂崩れが起きて多くの作業員が亡くなり、高価な機械が埋まってしまった。現地の人びとは、精霊は丘などの自然景観に宿っており、それを改変しようとする作業員たちを襲い殺したのだと語るようになった

(Santos-Granero 1998 : 136-139)。開発中や建設中の現場で不慮の事故というものはよく起こるものである。そうした事故さえも、現地の人びとは精霊の仕業と考え、道路開発に対して噂をささやくことで「抵抗」していたのである。

また本稿の研究対象地域であるペルー、アンデス北部のカハマルカ県の鉱山開発に対する「抵抗」でも精霊の仕業という噂が活用された。ファビアナ・リーは、鉱山開発に対する現地住民の社会運動や反発の様子を研究し、次のように説明している。

カハマルカ県では、現地の住民に「聖なる山(Apu)」と信仰されるキリッシュ山(Quilish)で鉱山開発が実施されたことに対して、2004年に大規模な社会運動が起きた。キリッシュ山で採掘をおこなうためには山の合意(許可)が必要であり、鉱山会社は儀礼的に金を採掘する対価としてトラックいっぱいの砂糖を山に捧げた。だが現地の住民は、山は怒っており、採掘によって怒った山は「悪魔(devil)」になると考えていたという。彼らの間では、夜な夜な「悪魔(“La Gringa”(白人の女性))」が作業中のトラックの前に現れて、トラックが崖から転落するなどの事故を起こし、作業員たちを襲い殺しているという噂話がささやかれるようになった。こうした作業員の死は、鉱山会社が金を採掘するために悪魔と契約したため、その犠牲として捧げられたものであるとされた²⁾。その後鉱山開発は進み、キリッシュ山から流れる川の水の量は減り、有害物質を含むようになった。このような変わり果てた山の様子から、現地の住民はキリッシュは「聖なる山」から「悪魔」に変わってしまったと認識するようになった(Li 2015 : 107-110)。

アンデスでは山には精霊が宿るほかに山自体を「聖なる存在」として認識する信仰がみられる。こうした精神的存在や信仰が根拠として、近年では各地で大規模な鉱山開発反対運動が展開してきた。

近年のラテンアメリカでの政治の場で、「大地の女神(Pachamama)」や「聖なる山(Apu)」という現地の信仰が現れる場合がある。例えば、2008年のエクアドル共和国憲法の第7章に「パチャママ(大地の女神)」という文言が加えられている。マリソール・デ・ラ・カデナは、こうした政治の場に召喚されている大地(ランドスケープ)は感覚を持った存在者たちの付置からなり、存在者たちは「ティラクーナ(tirakuna)」すなわち「地のものたち(earth beings)」と呼ばれていると指摘する(de la Cadena 2015 : 25-26、デ・ラ・カデナ 2017 : 53)。

デ・ラ・カデナは、ペルー、アンデス南部クスコの聖なる山アウサンガテ(Ausangate)を含む地域での鉱山開発に対して、2006年に起きた住民たちのデモについて調査している。アウサンガテを含み聖地の場でもある山脈の頂点の1つであるシナカラ(Sinakara)にある鉱山の利権獲得に抗議するために、クスコの中心広場に1000人以上の現地住民(農民)が集まった。そのなかで、彼女と深い親交があったナサリオ・トゥルポは、鉱山に反対する理由として、「アウサンガテは鉱山を許さないだろう。アウサンガテは怒って人を殺すかもしれない。その殺害を防ぐために鉱山は開発されるべきでない」と述べ

ている（デ・ラ・カデナ 2017：50-51）。

こうした発言に対して、彼女は、多元世界の政治は衝突の次元を加えるが、イデオロギーやエスニシティの保障はしない。鉱山側は、利益を得るためにアウサンガテの怒りを買うというリスクを進んで冒そうとしているかもしれない。アウサンガテがいくら強情でも、政治的なプロセスの中で敗北する可能性はある。しかし、(ナサリオたちにとって)山以外のものであるということが沈黙のうちに否定されることはない。多元世界の政治は、部分的につながった諸世界のあいだから現れる衝突を認めるからだ。彼の側から政治を糾弾するが、彼女は彼女の側からナサリオたちの住み場所を守りたい³⁾と論じている（デ・ラ・カデナ 2017：73）。

このように、ナサリオたちは「地のものたち」とのつながりから政治の場に出て、鉱山反対のデモを展開している。対してデ・ラ・カデナは、彼らの先住民言語（ケチュア語）の世界観は近代社会では理解されないかもしれないと考える。特に、近代社会での政治用語と先住民言語とは部分的にしか意味が重ならない。そのため彼女は、彼らとの長い対話によってコスモロジーの「部分的つながりによる翻訳」を試みている。その「翻訳」を通じて、彼女は、彼女の側の世界での現地住民による世界観の理解を目指している。こうした議論では、従来の開発に対する「伝統的な」抵抗という構図ではなく、近代政治の場と「地のものたち」のつながりがパラレルに存在し、ときに衝突する可能性が考察されている。

以上、アンデスにおける近代開発と現地住民の世界観との関係を概観してきた。これらの開発に対する研究の共通した特徴として、現地の住民は精霊や聖なる山などの精神的存在を根拠として、開発に「抵抗」という図式がみられる。だがデ・ラ・カデナの研究が指摘するように、近代開発と現地の世界観とが単純な対立関係にあるのではなく、それ以外の図式の可能性を検討する必要がある。アンデスの開発をめぐる関係において、直接的な対立関係だけでなく、ミクロに折衝・調整し合う関係の可能性も見いだせると考えられる。そこで次に、研究対象地のバンバマルカにおける開発と住民との関係を確認する。

2 バンバマルカ町での開発と住民の関係

ここでは、アンデス北部山地に位置するバンバマルカの概要と文化的背景、調査についての基本情報を示したうえで、元中学校教師であったホセ（仮名）の語りから現地の鉱山開発に対する住民の姿勢を考える。

まずバンバマルカ町の概要を紹介する。カハマルカ県の中心地カハマルカ市街地から乗り合いバスで3時間ほど行ったところにワルガヨック郡がある。ワルガヨック郡は3つの地区から成り立っている。3つの地区とは行政の中心であるワルガヨック地区、経済の中心であるバンバマルカ地区、酪農地帯のチュグール地区である。3つの地区の中

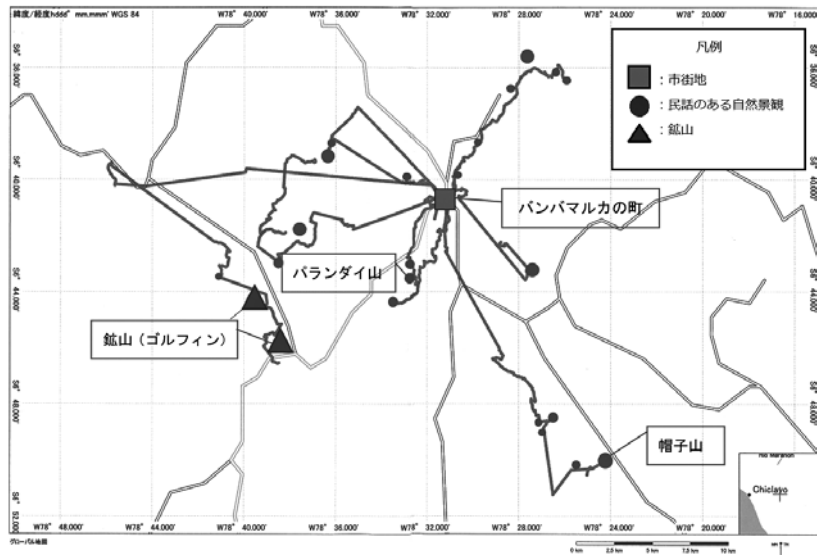


図1 バンバマルカ地区における特定の自然景観と鉱山の位置 (筆者作成)

でバンバマルカは最も人口が多く栄えている。毎週土曜には街全体に市場（いちば）が立ち、周辺地域や農村から多くの人が集まりにぎわいをみせている。

バンバマルカ地区の人口は 74,523 人（2005 年時点）で、地区面積は 451.38km²であり、その中心地は標高 2,526m に位置している。季節は雨季（10 月～3 月）と乾季（4 月～9 月）に大別され、降雨量のほとんどは雨季に集中している。

前節ではアンデスにおける現地住民の「地のものたち」へのつながりや精霊に関する噂話などを紹介した。だがバンバマルカの位置するアンデス北部では、クスコなどがある中央・南部高地と異なり、精神的存在への意識はそれほど強くない。アンデス北部山村は中央・南部高地とは異なり、先住民言語のケチュア語話者が少なく、インディオ（先住民）よりも白人とインディオとの混血（メスティーソ）が多いといわれている。そのためインカ帝国の首都クスコ周辺とは異なり、バンバマルカでは先住民文化は色濃くなく、先行研究で確認した「大地の女神（Pachamama）」や「聖なる山（Apu）」の名前すらも知らない者が少なからずいた⁴⁾。その代わりに、ペルー全土では民話に対する傾倒がみられ、バンバマルカでも学校の先生を中心とした知識人などが民話を収集している。だが一方で、当該社会の一般住民、特に土地の文化や歴史にそれほど関心のない者の中には、自分の土地の民話について知らない者もいる。

次に事例を詳述していくが、本稿で扱う事例は 2020 年 2～3 月に得られたインタビュー調査と参与観察をもとに検討したものである。筆者は単独でバンバマルカに訪れ、のちに紹介するミゲルの助力を得て、現地のインタビュー調査と GPS 端末機器を用いた踏査を実現した。バンバマルカの町を調査した理由としては、カハマルカ県では 2012 年をピークに鉱山開発に対する大規模な社会運動が展開され、当該地域はその担い手が多



図2 鉱山（ゴルフン）の様子（筆者撮影）

く住む町の1つであるためである。

次にバンバマルカでの民話に対する知識人による傾倒の事例として、現地でおこなわれている鉱山開発に対する元中学校教諭のホセの語りを紹介する。

バンバマルカ地区にはゴルフン（Gold Fields）と呼ばれる大規模な鉱山がある。ゴルフンでの作業員の臨時雇用は、バンバマルカの町の住民ではなく、カハマルカ市街地の住民を対象とする場合が多い。また同鉱山で雇われる作業員

や技師たちがお金を落とすのは、主にカハマルカ市街地である。そのためバンバマルカの町では、鉱山採掘会社から経済的な利益を直接的に得ている住民が比較的少ない。町の人びとの間では、鉱山開発の影響で水質汚染が起きて、病院の近くを流れる川ではマスが取れなくなったという噂がささやかれることもある。

こうした鉱山開発について、元中学校教諭のホセ（50歳代、男性）は次のように語った。「ゴルフンの山1つ挟んだこちら側にはヤナコチャ湖（Lago Yanacocho）がある。その湖にまつわる多くの民話では、湖から多くの支流が流れ出ており、この街の4ヶ所近くの川が湖から流れ出ている。川は住民の生活用水であり、飲み水にも使われている。そのためヤナコチャ湖が鉱山によって汚染されないか、住民は注視している。今のところ、湖はきれいだ」。

ホセの語りでは、住民の鉱山開発に対して危惧・反発する根拠が民話にあった。ホセが民話に傾倒する理由には、彼の父親の影響があった。農村に住むホセの父親は、昔から本で読んだり住民から聞き取ったりした民話を書き留めてきた。そしてホセはその民話を本として編纂し、出版した。彼は中学校教師をおこなっていた際、授業で民話を利用してその教訓や知恵を教えていたという。彼は父親の仕事を誇りに思い、民話に愛着があったと推察される。また彼は中学校で生徒に暗記した民話を発表させる行事を催し、生徒や父兄たちに人気だったと述べている。彼が教師時代に教えた民話が生徒たちに受け入れられていたということは、地域住民も民話に関心を持っていたといえる。

このように、バンバマルカでは民話を根拠として現地住民による鉱山開発への「抵抗」の1つの様態である反発の姿勢がみられる。民話は現地の歴史的文化的プロセスが含まれているだけでなく、自然景観からイメージされる現地のコスモロジーも含みこまれている。そのため民話は現地住民の内的なまなごしへの理解を可能にし、ときに外的景観と内的景観を往還するつながりを提供する。

IV 外的景観と内的景観の横断

1 民話を用いた観光ツアーガイド

ここでは、まずはバンバマルカの観光事情と民話を語る観光ツアーガイドであるミゲルの実践と思いを紹介する。そのうえで彼が観光客の期待に即したかたちで民話を用いるため、観光客は部分的に外的景観と内的景観を往還する経験を得ることを示す。

バンバマルカの町には、バス・航空チケットを扱う会社や観光客向けのホテル、レストランなどはあるが、現地の観光ツアーを扱う旅行会社は存在しない。それだけバンバマルカの観光地は、国内外において知られてはいないのが現状である。年間で約 2000 人の観光客がバンバマルカに訪れるが、観光客は外国人観光客よりも国内観光客の方がはるかに多い。旅行ツアーを望む者はバンバマルカ区役所の観光オフィスを訪れる。年間、国内観光客の 100 名弱がそのオフィスを利用している。有名な観光地を巡るルートが 4 パターン⁵⁾ ほど用意されており、時間と価格に応じて観光客はツアーを決める。観光ツアーのルートの中には博物館や温泉リゾート地、町外れのパランダイ山 (Paranday) の斜面にみえる洞窟群 (現地では「窓 (ventanillas)」と呼ばれている) を巡るルートが人気で、価格や時間的にもお手頃である。

町には、観光地の概要や歴史、民話などをまとめた一冊の書籍 (ガイドブック) がある。その著者であるセサル・G・メヒア・ロサーノは中学校で観光学や民俗学を教えていた。同時に 30 年近くかけて、彼は観光地である自然景観の近くに住む人びとから聞き取りをして民話や口述史を採集した。また彼は、各地の考古学的遺跡から土器片や遺物を採取して博物館に保全する作業もおこなった。2017 年に彼は、“*Conociendo Mi Comunidad, Fortalezco Mi Identidad*” (Mejia Lozano 2017) という書籍を刊行した。彼がその書籍を刊行した理由は、地元の観光や文化について学生に教えることと、バンバマルカの人びとの歴史的文化的アイデンティティを高めることにあった。

観光オフィスでミゲル (30 歳代、男性) は唯一の観光ツアーガイドとして働いている。彼はカハマルカ大学の修士課程に籍を置く学生でもあり、観光学を専攻している。彼は上記のメヒア・ロサーノの書籍を読んで、バンバマルカの文化や歴史、民話を勉強してきた。彼は観光客を案内する際に、自然景観の概要や歴史はもちろんのこと、景観にまつわる民話を紹介することを心掛けている。

ミゲルは観光ツアーで民話を用いる理由について、次のように誇らしげに語る。「バンバマルカに訪れる観光客の多くはカハマルカ市街地からやって来る人びとで、彼らは親せきや友人がここに住んでいるからという理由で訪れ、ついでに観光ツアーを申し込んでくれる。バンバマルカには国内的に有名な観光地 (自然景観) がない。そのため観光客は観光地をそれほど興味なく、ただ見ている場合がある。そのような際に、私が景



図3 パランダイ山の「窓」(筆者撮影)

観にまつわる民話を話すと、観光客は感嘆してたくさん質問してくれる。民話を話すことで、彼らは興味を持って景観を見てくれるんだ。

ミゲルの観光ツアーの様子について、筆者と彼がパラダイ山を登った時の様子を事例に説明してみたい。パラダイ山の斜面にはいくつかの洞穴群があり、現地では「窓」と呼ばれている。われわれは山を、世間話をしながら休み休みのほり、斜面横一面に

「窓」がきれいに並ぶ場所にさしかかった。そこで彼は休憩しながら、「この「窓」はブレ・インカ期には墓として利用され、遺骸と共に土器や装飾品が埋め込まれ、白土で表面を塞いでいた。その後スペイン人がやって来て、墓を掘り出して中の財宝や装飾品を盗み出していった。だから今のような洞穴のみが残っているんだ」と「窓」の歴史について説明した。

さらにわれわれは頂上付近の切り立った斜面にある2つの「大窓」がみえる位置に到着すると、彼はその「大窓」についての民話である「血の涙を流すコンドルと金の鍋」の話⁶⁾ をしてくれた。

彼は観光ツアーにおいて、特定のビューポイントごとに説明する内容を区別しており、その景観にふさわしい内容を選んでる。筆者とのツアーでは、彼は「窓」がきれいにみえるポイントでは歴史的な内容を説明し、「大窓」がみえるポイントではその景観に由来した民話を説明した。民話の内容はメヒア・ロサーノの書籍通りではなく、いくぶん簡略化されていた。また彼は身振り手振りを付け加えてわかりやすく説明したため、筆者は目の前の景観の歴史的文化的意味を容易に理解することができ、現地の精神世界を垣間見ることができた。

筆者が観光地を訪れた当初は、ただ外的景観を眺めるだけだった。そこでミゲルが歴史的説明や民話を話すことで、観光客は内的景観の一部に触れることができた。もちろん事例の筆者は文化人類学者であり、純粋な観光客よりも当該地域の歴史や文化に学術的な関心を抱いているという意味では例外的な存在かもしれない。だが、観光客が理解しやすいかたちで要領よく豊かに物語を披露するミゲルの巧みな話術によって、筆者だけでなくその他の観光客も、民話に依拠して形成される現地の人びとの自然景観に対する内的なまなざしを経験する。結果、われわれは特定の景観の文化的背景に強く惹きこまれることになる。実際、彼の説明を聞いた観光客は、積極的に質問して自身の「探求心」を満たそうとする傾向にあった。

彼が観光客の関心を誘う理由として、彼は観光客を見ながら時間配分や場所を柔軟にコーディネートし、個人ベースで関心に応じたアレンジができるガイドであることが挙げられる。彼は観光客がどこまで踏み込みたいかに応じて、内的景観を詳しく話すか、それとも垣間見せるにとどめるかを変化させ、話す予定の民話や歴史の内容や分量を決めている。そうした彼の適切な裁量によって、観光客はそれぞれの関心に応じて内的なまなざしを得て、外的景観と内的景観とを部分的に往還する経験を得るのである。

またミゲルは、近年の彼自身の活動を交えて次のように話してくれた。「バンバマルカの行政は、観光地は国内外で有名でなく、人びとには関心がないと考えている。また昔は学校で民話を教えていたけれど、今ではほとんど教えていない。学生は歴史や文化を知っても職を得られないし、稼ぐこともできないと考えている。今の学生は稼ぎのいい医者や技師、会計士などを目指しており、民話を学ぶよりもパソコンの使い方を学ぶことに熱心だ。私は（バンバマルカの観光地を）マチュピチュと同じくらい歴史的文化的価値のあるものだと考えている。だから友人と一緒に、観光地の写真やプロモーションビデオをフェイスブックやインスタに投稿して、観光地を広く知ってもらおうとしている」。

ミゲルはバンバマルカの観光地を、行政の考えとは異なり、世界中の観光客が集まるマチュピチュと同じくらい文化的価値の高いものだと考えている。彼は観光地の民話や歴史を知ってもらえば、今以上に観光収入は望めると信じている。このような彼の民話の世界で社会を切り開くという信念と、聞き手を適度に内的景観に導くガイドは、次項で検討するように、現状を変える「オルタナティブな」方途を生み出す可能性がある。

2 ミゲルとフアンの鉱山開発をめぐるいざこざ

筆者とミゲルは帽子山（Sombreruyo）に訪れた際に、山のふもとに住む唯一の家族と出会った。そこで起きたミゲルと住民フアンのいざこざの事例を詳述する。そのうえで、開発をめぐる住民同士の関係には直接的な対立関係ではなく、双方がミクロに折衝・調整し合う「オルタナティブな」道筋によって、結果として開発を阻む作用が生じることを考察する。

バンバマルカ町から南に2時間ほど車を走らせたところに、台形のフォルムをした帽子山と呼ばれる岩山がある。この山には「タントヤリ（Tantayali）の首長」という民話⁷⁾がある。またメヒーア・ロサーノによると、先スペイン期の民族集団の首長は雨乞いなどをカテキル神（雷雨の神）に願う際に、天空に近い山で儀礼を行っていた。そうした山の1つとして帽子山がある。この山はかつて首長たちが暮らしていたか儀礼の場として利用していたかしていた。頂上付近には住居跡や土器などの考古学的遺物があり、その暮らしを考古学的に証明している。こうした事情からも、山は歴史的文化的価値の高いものであると想起される。

以下は、筆者とミゲルが観光ツアーで訪れた際に起きたミゲルとフアンのいざこざの内容である。

【事例】 鉱山への売却をめぐるミゲルとフアンのいざこざ

筆者とミゲルが帽子山を訪れた際、われわれは山のふもとに住むフアン（60歳代、男性）家族の敷地を抜けて山を登った。登った後にわれわれは、フアンに言われるままのチップを支払った。フアンは観光客からいくら取れるかなど想定がなかったため、夕飯代くらいの金額を支払ってくれといった。7人家族の夕飯代ということで、われわれは30ソル（約1,000円）を支払った。通常7人家族の食事準備代は20ソル（約600円）程度で収まるため、われわれの支払った金額は相場以上のものである。

ガイドのミゲルはこの山は歴史的にも文化的にも価値のある山であり、観光地としてこれから紹介したいから協力してくれないかとフアンに持ちかけた。ミゲルの提案としては登山代金を一定価格に決めて、観光オフィスが客を紹介するから相談なしに登山させてほしいという内容だった。ミゲルはこの説得の際に、「（観光客は）関心を示す（se interesan）」という文言を頻繁に使用していた。

それに対してフアンは、鉱山会社が近くの山を試掘した際に多くの鉱物が含まれているという噂を聞いて、この山を鉱山会社に売って大金を得たいといった。カハマルカ県では、かつて鉱山開発に対する社会運動が起きるほど各地に鉱物が多く眠っているため、フアンがこのように期待するのも当然である。

だが住民や農民の多くは、鉱山開発の影響による環境破壊や水質汚染を心配して反対している。バンバマルカでも鉱山開発による汚染を危惧して反発する者は多く、ミゲルもその1人である。ミゲルはフアンの様子を見ながら、時折山にまつわる民話や歴史を要領よく説明した。フアンが頂上付近の土器片などには価値があるのかと疑問をぼつりとつぶやくと、ミゲルはフアンと帽子山を眺めながらスペイン人制服以前にこの地には民族集団が暮らしていて歴史的にも十分に価値があることを端的に伝えた。そのうえでミゲルは、鉱山に売る以上に山には歴史的文化的な価値があるため、町の観光業に協力してくれないかとフアンを説得した。

結局、ミゲルの説得を聞いたフアンは、観光客は来るんだなと何度か念を押し、最終的に鉱山会社には売らないといった。そして彼は、観光客から一定の料金を得るというミゲルの提案を考えてみるといった。

*

フアンはミゲルの説明を聞くまでは山の文化的背景を知らなかったように思える。ただし彼は完全な外部者としてのまなざしではなく、頂上付近の住居跡や土器片のある景観に愛着を感じていた。だが、彼は特定の景観に対する内的なまなざしから帽子山を眺めていたわけではなかった。

この事例では、ミゲルがフアンに山の民話や歴史を相手の要求に応じるかたちでの的確

にかつ説得的に伝えることで、フアンは愛着をもって眺めていた山の景観に文化的な意味があることを知るようになった。さらにミゲルが相手の疑問に応じて要領よく説明することで、観光客同様に、フアンは当時生活した人びとの特定の景観に対する内的なまなざしを共有したのだろう。そのような経験から、フアンは外的景観と内的景観を部分的に往還してつなげる経験を得たのである。

だが単純にフアンが外的／内的景観を往還する経験を得ただけでは、彼は山を鉱山会社に売却するという目算を改めなかっただろう。彼が考えを改めた理由には、少なくとも以下の2つが考えられる。1つは、彼はいつ交渉できるか分からない鉱山会社からの利益の期待よりも、相場よりも多くの金額を支払ってくれる観光客から得られる利益の方が現実的で魅力的だ、と外的景観について算段したことである。実際、フアンはこの時に筆者らが支払った金銭が想定外に大きいものであったことに驚いていた。もう1つは、彼が住居跡や土器片など愛着を持って眺めていた景観が内的景観の文化的価値とつながり、住民として自然景観に誇りを感じたことである。フアンがミゲルに山の文化的価値が存在するのかと質問したのは、経済的な期待によるものであったかもしれないが、愛着のある景観が内的景観と結び付いたことへの驚きもあったと考えられる。

こうした外的景観の経済的利益と内的景観の文化的価値とがミゲルの説得や民話によるイメージ世界に折り込まれていたため、フアンは鉱山会社への山の売却を考え直したのである。

V おわりに

近年ラテンアメリカ各地では近代開発や鉱山開発が盛んにおこなわれている。そうした開発をめぐる住民同士の関係には直接的な対立関係ではなく、相互に折衝・調整し合うことで、結果として開発へのけん制につながる作用が生じる可能性はないのかというのが本稿の問題意識であった。景観人類学で提唱された外的景観と内的景観という整理を援用して開発をめぐる景観人類学的研究を考えると、内部者ではあるが外的景観から開発を眺める住民についての議論が十分でなかった。アンデスの開発をめぐる人類学的研究では、信仰や精神的存在を根拠として、開発に対する住民の「伝統的な」抵抗という図式が論じられてきた。バンバマルカの住民たちを考えてみても、鉱山開発に対する民話を根拠とした反発という姿勢がみられた。このようにアンデスでは、内的景観を本質的に扱うことで外的景観に対する内的景観からの直接的な「抵抗」という様相が指摘できる。そのうえでミゲルの観光ツアーにおける民話を用いた実践と帽子山でのミゲルとフアンの鉱山をめぐるいざこざを検討した。

景観人類学では、自然の中で生きる内部者と経済的価値を重んじる外部者という明確な区分がみられた (Hirsch 1995: 13)。事例では、当初のミゲルとフアンの鉱山をめぐ

る関係は、前者は文化的価値に依拠して観光業による発展を望む者で、後者は鉱山開発による経済的価値に依拠したうえで収益を望む者であった。内部者ではある景観の眺め方が異なる者同士の間には、単なる自然的価値／経済的価値による対立関係でなく、依拠する価値観が異なるが、ともに経済的な発展を望むものであった。つまり事例から、先行研究の環境・文化的価値と経済的価値は区別できて対立するものであるという構図とは異なり、様々な価値観が折り込まれた関係が示された。

また先行研究の多くでは、内的景観を本質的に扱うことで外的景観と内的景観との直接的な対立関係が議論されてきた (cf. Stewart and Strathern 2003・2005、Santos-Granero 1998、Li 2015)。事例ではミゲルが的確に民話を用いることで、ファンが外的景観と内的景観とを部分的に往還する経験を得て、さらにその説得には外的景観の経済的利益と内的景観の文化的価値とが折り込まれていたため、ファンは考えを改めた。ここには、外的景観と内的景観との直接的な対立関係はなく、民話によって両者が部分的に横断し、折り込まれるという「オルタナティブな」道筋がみられる。こうした「オルタナティブな」道筋によって、回りまわって鉱山開発をけん制する作用が生み出されたと指摘できる。

デ・ラ・カデナの研究 (de la Cadena 2015、デ・ラ・カデナ 2017) が指摘するように、ペルーでは近代社会においてもパラレルにプレ・インカ期の文化や世界観が存在している。近代的な経済的利益を魅力に感じるファンであっても、現地のコスモロジーと文化的価値をどこかで認めており、最終的には内的なまなざしによる文化的価値を重視したのであろう。

最後にホセやミゲルの事例から、近代開発や鉱山開発といった外的景観の広がりに対して、人びとが民話や歴史に依拠しながら内的景観を再構成し、対応していくプロセスとして読み直すことができる。その見方を踏まえると、景観の観光化について1つの可能性が想起される。観光の文脈において「開発優先／景観保護」の問題が浮上する際には、景観の「経済資源化」による現地への利益還元や利益分配が焦点の1つとなる。ミゲルの観光ガイドの場合、観光名所をカッコで区切って現地住民から遠ざけるのではなく、自然景観を生活の一部としていた当時の住民の精神世界に民話を用いて観光客を近づけるものである。こうした観光ガイドは、あくまでも現地の世界観や生活を中心に置く観光であり、現地の生活に根差した利益分配が期待される。

このような自然と人間の境界を精神的に取り払おうとする実践によって、開発をめぐる関係において直接的な対立関係だけではない、外的景観と内的景観とを部分的に横断する「オルタナティブな」方途が醸成されている。その道筋によって「持続可能な」開発が期待されるのである。

謝辞

本稿の調査は、科学研究費の研究活動スタート支援（課題番号:19K23142）及び新学術領域研究「出ユーラシア」の公募研究（課題番号:20H05142）の助成によって実現した。また、本稿の執筆にあたっては、立命館大学の小川さやか教授から有意義なアドバイスをいただいた。さらに2名の匿名の査読者からは、的確なコメントをいただいた。何より、筆者を快く迎えてくれたバンバマルカ町の人々には大変お世話になった。ここに記してお礼を申し上げたい。

注

- 1) ジェームズ・スコットは、貧しい農民の権力者に対する戦略として、農村内の有力者に対するゴシップ、作り話、中傷、サボタージュなどの日常的な抵抗を挙げ、一連の「抵抗」のかたちを「弱者の武器」と呼んでいる（Scott 1985: 27）。
- 2) ラテンアメリカでは、鉱山開発の採掘によって富を得たものは「悪魔」と契約しているという噂話が広くささやかれている（cf. Taussig 1980）。
- 3) デ・ラ・カデナはペルー出身の先住民と白人の混血であり、近代教育を受けた立場の人物である。彼女はナサリオらとの交流を通じて（自分の原点と考えられる）先住民世界を探求しようとする。他方ナサリオは、クスコの観光事務所で「アンデスのシャーマン（呪術師）」とし仕事をしており、スペイン語を殆ど喋ったり書いたりせず先住民言語（ケチュア語）しか話せなかった。だが彼の人生は例外的なものであった。彼はシャーマンとして、ワシントンポストや Caretas（リマを拠点とした全国メディア）に大きく取り上げられ、スミソニアン博物館のキュレーターとしてワシントン D. C. に赴いたこともあった。デ・ラ・カデナが先住民世界を知ろうとしたように、ナサリオもまた外の世界を知ろうとした。そのため彼らには深い親交が生まれたが、デ・ラ・カデナはあくまでも彼女の立場から先住民世界を「翻訳」することを目指した。デ・ラ・カデナの理解は、ときにナサリオたちの言葉と彼女の用いる（「近代的な」）概念とが一致することがあり、そうした「部分的つながり」からの翻訳である（de la Cadena 2015: xvxxvii）。
- 4) リーの調査した村ではキリッシュ山を「聖なる山(Apu)」と呼んでいた。だが彼女の調査した村は、歴史的にミティマエス（強制移住）によって他地域からカハマルカ県にやってきた民族集団が形成してきた農村である。その村には比較的先住民言語話者が多く存在し、周辺村落とは異なる独特の信仰がある（Li 2015: 120-126）。
- 5) だいたい各ルートのツアー料金は往復で 50~150 ソル（約 2,000~5,000 円）程度で、料金のほとんどは車のチャーター代である。
- 6) この民話は次のような内容である。パランダイ山の頂上付近の切り立つ斜面に2つの「大窓」があり、その昔「大窓」にはそれぞれ金の大鍋があった。スペイン人がその金の大鍋を奪おうとしたが、大窓の中で大きなコンドルがいて大鍋を守っていた。ある日大鍋の1つが落ちて、コンドルは血の涙を流した。コンドルはもう1つの大鍋とともに消え去ってしまった。その後、スペイン人は大鍋が手に入らなかったことから欲の渴望にとらわれ、あらゆる「窓」（本来は墓）を破壊して、財宝を奪っていったというものである。
- 7) 民話の内容は次のようなものである。先スペイン期に、インカ皇帝はこの地域の民族集団（タンタヤリ）にインカ道造ることを首長に命じた。決められた期日にインカ道の端にインカ皇帝の一行がやってくるため、それまでに 20km 以上の石畳のインカ道を通さなくてはならないという内容だった。その開通作業は期日までには到底完成しない、厳しい作業だった。高齢な首長は自ら斧を持って、いくにんかの村人と共にインカ道の開通作業に取り掛かった。村には、首長の座を狙う「邪悪な」若者があり、彼らがどうせインカ道など期日までにできないとささやいて、村人に開通作業に参加しないように仕向けていた。首長たちは期日までに開通するために、朝早くから夜遅くまで作業時間を増やして働いた。その厳しい作業がたたって、彼は死んでしまった。その後首長の死によって多くの村人が作業に参加するようになり、息子夫妻が指揮をとった。約束の日に、村人たちはインカ一行が待つ道の端にインカ道を通すことができた。事情を聞いたインカは「邪悪な」若者を捕らえ処刑し、首長の息子を次の首長にしたというものである。

参考文献

- デ・ラ・カデナ、マリソール 2017「アンデス先住民のコスモポリティックス」田口陽子訳、『現代思想』54(4):46-80 (Indigenous Cosmopolitucs in the Andes: Conceptual Reflections beyond “Politics”. *Cultural Anthropology* 25(2):334-370, 2010)。
- de la Cadena, Marisol 2015 *Earth beings: ecologies of practice across Andean worlds*. Durham and London: Duke University Press.
- Garrier, James G. 2003 Biography, Ecology, Political Economy: Seascape and Conflict in Jamaica. In P. J. Stewart and A. Strathern (eds.) *Landscape, Memory and History: Anthropological Perspectives*. London: Pluto Press, pp.210-228.
- Harper, Janice. 2003 Memories of Ancestry in the Forests of Madagascar. In P. J. Stewart and A. Strathern (eds.) *Landscape, Memory and History: Anthropological Perspectives*. London: Pluto Press, pp.89-107.
- Hirsch, Eric. 1995 Landscape: Between Place and Space. In E. Hirsch and M. O’Hanlon (eds.) *The Anthropology of Landscape: Perspectives on Place and Space*. Oxford: Clarendon Press, pp.1-30.
- 河合洋尚 2013『景観人類学の課題: 中国広州における都市環境の表象と再生』風響社。
- 小西公大 2016「景観と開発のあわいに生きる—インド・タール砂漠における風力発電開発事業と人びとの世界認識—」河合洋尚編『景観人類学 身体・政治・マテリアリティ』pp.227-248、時潮社。
- Li, Fabiana. 2015 *Unearthing conflict: corporate mining, activism, and expertise in Peru*. Durham and London: Duke University Press.
- Mejía Lozano, César G. 2017 *Conociendo Mi Comunidad, Fortalezco Mi Identidad*. Cajamarca: Pirkas Digital Art’s.
- オジェ、マルク 2002『同時代世界の人類学』森山工訳、藤原書店。
- オジェ、マルク 2017『非一場所: スーパーモダニティの人類学に向けて』中川真知子訳、水声社。
- Santos-Granero, Fernando. 1998 Writing History into the Landscapes: Space, Myth, and Ritual in Contemporary Amazonia. *American Ethnologist* 25(2):128-148.
- Scott, James C. 1985 *Weapons of the Weak: Everyday forms of Peasant Resistance*. New Haven: Yale University Press.
- Selwyn, Tom. 1995 Landscapes of Liberation and Imprisonment: Towards an Anthropology of the Israeli Landscape. In E. Hirsch and M. O’Hanlon (eds.) *The Anthropology of Landscape: Perspectives on Place and Space*. Oxford: Clarendon Press, pp.114-134.
- Stewart, Pamela J. and Andrew Strathern. 2003 Introduction. In P. J. Stewart and A. Strathern (eds.) *Landscape, Memory and History: Anthropological Perspectives*. London: Pluto Press, pp.1-15.
- Stewart, Pamela J. and Andrew Strathern. 2005 Cosmology, Resources and Landscape: Agencies of the Dead and the Living in Duna, Papua New Guinea. *Ethnology* 44(1):35-47.
- Taussig, Michael T. 1980 *The Devil and Commodity Fetishism in South America*. Chapel Hill: University of North Carolina Press.
- Toren, Christina. 1995 Seeing the Ancestral Sites: Transformations in Fijian Notions of the Land. In E. Hirsch and M. O’Hanlon (eds.) *The Anthropology of Landscape: Perspectives on Place and Space*. Oxford: Clarendon Press, pp.163-183.
- Williams, Raymond. 1973 *The Country and the City*. London: Chatto & Windus.

【2020年12月23日受理】

The Restraint by Partially Connecting Outer/Inner Landscapes:

Case Study of the Mine Developments in Cajamarca, Peru

FURUKAWA Yuki¹

Abstract : In recent years, modernization, industrialization, and mine developments have been taking place in various countries of Latin America. Previous studies have discussed the "traditional" worldview-based resistance by the local residents to such developments. In particular, much of the Andean anthropological research on development has discussed the scheme of resistance to the developments from the point of view of the outer / inner landscape arrangement in landscape anthropology. Within this framework, researchers have explored how the local people resist development in correspondence to the inner landscape reflective of their "traditional" worldview. In this paper, I aim to investigate not only the tactics of direct resistance towards the development of Bambamarca, Cajamarca, Peru as seen in the relationships of the residents, but also various practices that lead to the restraint on development and that happen as a result of negotiation and coordination between the residents. In Bambamarca folktale sightseeing tours, tourists can gain an experience of partially connecting outer/inner landscapes by listening to folktales related to a particular landscape. The guide, Miguel, provides an understanding of the inner landscape using these folktales to resident who expects to benefit from the mines. He expected to benefit from the mine development project, but finally abandoned the expectation. Through this and similar cases, this study shows how the "alternative" path of intersection between the outer / inner landscape can result in indirect resistance to industrialization.

keyword : Andes, Mine Development, Outer/Inner Landscapes, Folktales

1 : Kinugasa Research Organization, Ritsumeikan University